
Death-Dream

水面 幸陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Death - Dream

【Nコード】

N7568C

【作者名】

水面 幸陽

【あらすじ】

神は言った。「この世界の上に新しい世界を作ろう。」しかし、その世界は五つにも及んだ。「仕方ない。争奪戦だ！」一つの世界を賭けた物語が始まる

Part 0：プロローグ

時は2235年。

空は紅く、地は黒く、太陽は蒼い。

誰が予想したであろうか。

その星は地球では無くなっていた。

『地球は死の星だ。夢など見るな、地球には死の未来しかない。』
その言葉を言った政治家は今どこにいるのだろう。

地球は全ての星を破壊した。

その言葉に意味はない。我等の知っている地球はこの世界には存在しない。

そう、『この世界』には存在しない。ならば…

この世界の上に新しい世界をつくらう。

その繰り返し、世界は五つにまで増えた。

神達は口々に言った。

「世界は一つでいい。」

「いっそのこと、すべて消そうではないか！すでに二つの世界はほとんど機能していないのだから！」

「どうせ生物は地球にしか存在しない。いまさら全て消えたところで何の問題がある？」

『世界を消す』

「しかし地球にある『科学』とやらは重要だ！せめて一つだけでも残そうではないか！」

「同感だ！一つは残そう！」

ふと、それまで黙っていた神が呟いた。

「仕方ない、争奪戦だ。人間の力とやらで世界を決めてもらおう。」

神々の中で歓声上がる。

争奪戦だ

Part 1: はじまり

2040年9月1日、瑠羅学園始業式。

毎年、毎回お馴染み学園長の長つたらしい挨拶は最近多発している、『能力者』の通り魔についての話で終わった。立ちながら寝ているという器用な行動をしていた賢時は、終わったと同時に伸びをした。「つくう〜、あーよく寝た。それにしても学園長、夏休みの間に髪薄くなつてねえ？なあ、ラク？」

賢時は隣に立っている少年に話しかけた。

「別に、学園長の髪は今に始まったことじゃない。それよりラク、と呼ぶのはやめろ、逆地。俺のイメージが穢れる。」

「なあ?!ラクつてのが一番言いやすいからいいだろ?まさか月裏九一、とフルで呼ばれたいか?」

「もっとマシな名前で呼べ、と言ったんだ。お前の脳はアリ以下か?」

いつもと変わらないやり取りをしているのは逆地こと、逆地賢時とラクこと、月裏九一ツキウラクイチである。賢時と九一は子供のころからの幼染みで、小学、中学、果てには高校と一度として別々のクラスにならなかったある意味すばらしいコンビなのである。

「まあ、それは置いといて、お前の靴箱になんか手紙つぱいの入ってなかったか?」

始業式も終わり、教室に帰る途中の廊下で賢時は九一の言葉をあつさりとし、話を交える。その話に九一は食いついてきた。

「まさかお前もか?他にもグミと悠基もあつたらしいぞ。」

「俺は美菜と亮子にも聞いたが二人とももらつてるって…。なんでもクラスのほとんどはもらつたつぱいな。でもその手紙どうやっても開かないんだよね、他のクラスはもらつてないし。中身なんて書

いてあるか気にならねえか？」

賢時はニヤリ、と唇を横に広げた。賢時がこの顔をする時は何か思いついた時の顔である。

「気にならないわけではないが…、何か特別な素材が使ってあるみたいで材質は紙でも鉄でも切れなかったが？何か特別な方法があったのか？」

その言葉を聞いた賢時は口を開けた。しばしの静寂

「まさにその鉄作戦をやるうと思ったところだ。何て事だ！先を越されているとは…」

「やっぱりお前の脳はアリ以下だな、ほら、帰りのホームルームが始まるぞ。お前の席はここではない。」

教室にたどり着き、九一の机の前で顎を机に乗せていた賢時は後ろを振り向く。

そこには、鬼とも言える形相で立っている担任の姿。女王様こと、大崎凜はS型国語教師として学校中に名を馳せている。

「逆地、この俺様のホームルームを始めようつてのを邪魔した代償は大きいぞ。」

俺様、と言った女教師は手にどこからとりだしたか、鞭を持っていた。

ヒュン、ヒュンと鞭を回す。

「凜先生！俺はそんな趣味は…」

「問答無用！国語教師だとおもって舐めるなあ！」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ

しばらくの間、高校一年二組の教室では、断末魔の叫びが聞こえていた。

「まったく、どいつもこいつもたるんだる！しかし、遅刻者が手塚とはな。初めてじゃあないのか？ええ？逆地。」

「はい、まったくそのとおりです。女王様。」

教壇の隅にうずくまって、否、土下座の体勢ととっているのは他な

らぬ逆地だった。

「先生！朝私の机にこんなものが入っていたんですが？」

そんな逆地には目もくれずに発言したのは清水亮子だった。

「あれ？清水も？」

「え？も、つてことは順ももらってんの？」

「あれ？俺の机にも入ってる。」

清水の発言により、やや混乱気味な生徒。

「そうか、こりゃあ全員に春が…」

「明らかに違うでしょう、先生。なんかクラス全員持ってるつてのが怪しいですが、その手紙、開かないんですよ。」

その混乱を体よく収めたのは逆地だった。

そこへ手塚が滑り込んでくる。

「すいません、遅刻です。そしておはようございます、先生。」

「おお、手塚。なんでお前のようなやつが遅刻したんだ？」

凜は自分のペースを生徒に乱され気味だったため、普段はしないような質問をする。

「いえ、自分の靴箱に手紙が入っていたのでこりゃあ僕にも春が来た…」

『いや、明らかに違うから。』

クラス全員がハモった。いつもと変わらぬ風景。しかし、すぐに異変は訪れた。

「もういい、逆地、手塚。席に着け。やっとホームルームを始められる。」

凜はクラスの笑いを誘う。だが、生徒から返ってきたのは恐怖と戸惑いの声だった。

「うわあ！何だ?!」

「きゃあああああああ」

教室中に悲鳴が木霊する。

「なっ、どうということだ?!」

それもそのはず。ついさつきまで木製の板で覆われていた教室の床が、まるでブラックホールのように黒くなり、その上にある物体を飲み込み始めた。

誰も予測、予想しなかった事態。全員が膝のあたりまで闇に飲まれたとき、事は起こった。

教室前方の黒板に白い、髭を生やしたどこかのおじさんの様な顔が現れた。

『第4の世界の子らよ、貴方達に試練を与える。そなたらのマナと勇気を持って、世界の創造主たる神の元へ馳せよ。我は第5の世界の神。健闘を祈る。』

そして、顔は消えた。体はもう胸の辺りまできている。

誰もが何が起こったかわからなかった。突然、教室の床が黒くなり、自分たちが闇にのまれ、そして訳のわからない事を言う顔が黒板に現れた。この23世紀でそんな非科学的なことは誰にも理解できないはず。そして

すべてが闇に飲まれた。

Part 1: はじまり (後書き)

えーっと、MOAIです。

ひよっこです。

若輩者です。

暖かく見守ってくれたら嬉しいな、と思ったりもしています。
とりあえず、がんばるので、応援してください。

Part 2：始まり

ふと、目が覚めた。少し息苦しさを感じる。

辺りを見回してみる。全てが闇、どこにも光はない。

「ラクー！順！悠基ー！」

出した言葉は全部、闇に消える。反響もない。

まるで泥の中にいるようだった。体全部が重く感じる。

「てかここどこだよ…」

そう言った時、一筋の光が目当たる。上…？

顔を上げる、息苦しさが上がる。何もない虚空の空間にひびが入っている。

そこから光は漏れていた。よし、あそこに行けば…

必死で手を動かす。足を動かす。もがく

「ぶはあっ！はあはあ、何なんだよ、一体…」

暗い闇から目が覚める。

「何だ、夢か……あれ？ここは……？」

そこは緑で包まれた草原。四方に緑色の絨毯が敷き詰められ、視界の端の方には町の時計台らしきものが見える。そこに賢時は横たわっていた。

「えつと……確か教室にいて、床が抜けて、つてそうだ！皆は」

「ばつ、と飛び起きて辺りを見回すが、誰もいない。見えるのは時計台と草原のみ。そして、自分が横たわっていた場所には例の手紙。さつきまでは開いていなかった封が、まるでカッターで切ったかのように綺麗な切り口で開いていた。」

「……何が書いてあるんだ？」

その手紙を手に取り、そして中に手を入れる。硬い何かに手が当たった。

「うわ！重っ！」

紙とは思えないほどの重さ、しかしそれは確かに紙だった。とりだした重い紙を開く。がさがさ、という紙のこすれる音がした。

「えーつと、何？」この手紙を読むあなた！ようこそ、Dream Worldへ！！ここであなたにはここに来た皆さんと戦って、勝ち抜き、神の元へたどり着くよう、頑張ってもらいます。ここには四つの世界から、様々な方々がいらしています。この封筒に入っている物を駆使して、他の皆さんを消しながら、神のいる場所へ行ってください。そうすればこの世界はあなたの物です。では、これはあなたが読み終わると同時にあなたのマナに反応して、姿を変え、あなたを助けることでしょう。』、つてどういふ……」

賢時が読み終わった瞬間、その紙は小さな光になり、そして短剣へと姿を変えた。それは賢時の手のひらに落ちてきた。

「うわっ！痛っ！つたく、マジで訳わかんねえ。」

短剣が触れた部分に血が滲む。その痛みが、これは夢ではない事を物語っている。ゲームや本でしか見たことのないような世界、少し憧れていただけに……

「ちょっと探検してみつか。」

クラスの皆のことを忘れ、さっき読んだ手紙を忘れ、短剣を制服の腰のベルトに挟み、歩き始める。

「まずは、時計台だ！ついでにラクも探してやらないとな！」
未知の世界、その一步を賢時は踏み出した。

その頃

「ふう、大体状況は掴めたな。神の作った世界が四個あって、そこから選ばれた人がここに来て、新しい世界の争奪戦、といったところか。」

こちらもまた緑色の世界に囲まれている。賢時と違うのはそこが草原ではなく、森だということだ。辺りを見回す度に、かけている眼鏡のレンズが鈍く光る。

「とりあえず逆地を探してやらないと。あいつ馬鹿だから絶対に『探検だ！』とか言ってるさ。それにしても、この銃は使いやすそうだな。ご親切に説明書までついてるし。後はわからない単語を調べないとな。」

マナ、Dream Worldか。

「ここから一番近そうな村みたいなのはないかな？」
封筒と一緒に入っていた地図を開く。

「ここは、うん。森みたいだから、この町かな。」

地図に書いてある町。ディマル。

その方角を見ると、僅かだが、時計台のようなものが見えた。

「まずはここからだな。あいつが行くとしたら派手な場所に決まってる。」

銃と一緒に落ちていたカバンにしまい、肩にかける。

「よし！行こう。」

九一は時計台のある方向へ顔を向ける。九一の眼鏡に光の筋が走る。未知の世界、その一步を九一は踏み出した。

Part 3：初まり

煉瓦が積み重なった家、石畳の道、そして…

「超でかい時計台！すげえ！流石！」

「何が流石かわからないが、お前は単純すぎるな。こんなに簡単に見つかるとは…。逆に涙がでてくる。」

時計台を前にして叫んでいた賢時の後ろにはいつのまにか九一が立っていた。

「おおっ！ラク！心配したんだぞオ！無事で良かった…」

「その心配していましたが、とは言えない態度を先になんとかしろ。それよりその腰に刺さっているのは何だ？」

九一は賢時の腰の短剣に目を向ける。

「おお！良くぞ聞いてくれた！これはかの王様より授かりし聖剣、その名もエクスカ……」

「手紙がそれになったんだな。よくわかった。それよりお前、その手はどうした？」

1度ならず、2度までも賢時の言葉を遮り、自分のペースで物事を進める。九一の悪いクセだった。

「エクスカリバーに刺された。まあ聖剣だしな！俺のこのオーラと共鳴して飛びつこうとしたんだろう！さあ、我が手に光れ！エクスカリバー！」

暴走は止まらず、賢時は短剣を振り回しながら時計台の中に入ろうとする。その足を引つ掛けてとりあえず行動を止めた九一は、先ほどの地図を片手に町の構造を調べていた。

「何？なんでお前地図持ってるの？」

倒れたのにもかかわらず、元氣一杯の賢時は九一の横から頭を突っ込む。

「何でって…お前持ってないのか？封筒に入っていたはずだが…」

「え？マジで？封筒どこやったかな…」

自らのカバンの中をガサガサと漁る。

「これは…0点のテスト、これはノート、これは…ナイフ…あつた！」

すでにぐしゃぐしゃの封筒を取り出した賢時は満足そうに頷いている。

「あり？中には後、これぐらいしか入ってないぞ？」

封筒を逆さまにして出てきたのは細長い棒。鉄のような光沢だったが、重さは比較的軽かった。その棒を賢時は掴むと、その棒は僅かに光る。そして、棒の先からベーゴマ程の大きさしかなく、小さい竜巻が現れた。

「なっ！！！」

「おお！すげえ！これ魔法の杖とかか？！」

握っては離し、握っては離しを繰り返して沢山の竜巻をだして遊んでいる賢時を無視して、九一は考えに耽る。

俺の封筒には銃になった手紙と地図、賢時の封筒には短剣になった手紙と魔法の杖のようなもの。一体どんな法則でこのような…

ふと、その杖のようなものを確認しようと賢時に目を向けると、顔が青白くなった少年の姿が目に入った。

「おい！何お前死人ごっことかやってんだよ？！」

よく見ると手に持っている杖は既に光っていなかった。ごっこ、ではなく素で体力を消耗しているように見える。周りでは、野次馬が騒ぎ出している。

「大丈夫かな？ふむ、その子を私の家まで連れてきなさい。介抱してあげるよ。」

急に聞こえてきた声に顔を上げると、白衣を着た中年の男の人が立っていた。

「あなたは？」

念の為、と思いつながら一応身分の証明を要求する。すでに戦いは始

まっっているのである。この世界に来ている人が学生だけとは思えない。

「この町の医者だよ。大丈夫、危害を加えたりはしないから安心してきていいよ。」

まあここは右も左もわからないような状況だ。素直について行っても大丈夫そうだ。それに介抱をしてくれるのなら、マナについてとか聞いておいた方がいいしな…

「では、お言葉に甘えることにします。じゃあこいつを…」

「いいよ。僕が運ぶ。んん…ごほん、んん。『開け、divh!』」
なにやら言葉を言った後、その白衣の男の足元が円状に淡く光った。九一は目を見開く。

「リンクせよ!」出でよ! ena^{エナ}」

そう言うと、その光った部分があいかわらず青白い顔の賢時のすぐ下に移動する。そして、その円のなかから粒子の光が出てくる、その光は徐々に形を成し、人型の上半身のような形を作り上げる。

「なっ…く…熊なのか?」

ズルツ、という音がして、その光は完全に姿を現した。確かに、容姿こそは熊の形をなしているが、大きさと色、顔等には格段に違う。大きく開かれた目は赤く、体全体が黒く、ひびが入るように赤いラインがまるで心臓の鼓動に共鳴するかのようには、瞬く。

その大きく、黒い手には180cmを越す賢時の体がすっぽりと収まっていた。

「さあ、行こうか? ほら、君も来なさい。この子の友達でしょう。」
歩き出した白衣の男になかなかついて来ない九一の方を振り向く。白衣の裾がヒラリ、と揺れた。そのすぐ後ろには熊が立っている。

「すいません、すぐに行きます!」

その白衣の男に向かって九一は走る。もちろん、賢時の荷物をもつのも忘れない。

さっきのは何だ？呪文のようなものを唱えたかと思ったら熊っぽいのが現れて…。そこらへんも聞いといた方がいいな。

まだ、先程見た光景が目には焼きついている。白い光、どんな蛍光灯や何かを駆使してもあんなに暖かい光は現代の科学では無理だ。そして

「マナ…。何か関係があるのか？」

ぶつぶつと独り言を言いながら熊の後に続いて歩く。道の真ん中を歩いているせいか、ギャラリィはぎゃあぎゃああと騒いでいる。それほどまでにこの熊は珍しいのだ。

「ここが、僕の家兼診療所だよ。一般診療じゃなくてお客さんだから裏口から入ってね。」

僕の家、と呼ばれてもピン、とこない。それもそのはず、他の家とは桁違いに小さい。ドアは一人が通るのが限界であろう狭さで、家の横幅はそのドアと変わらない。上にも小さく、やはりドア程の高さしかない。

「あの…家と言われましても、どこが家なんですか？」

失礼な気がしたが、一応聞いてみる。明らかにおかしいからだ。

「ああ！ごめん、ごめん。この小さいやつ、これがドア。」

違う、そんなことを聞いた訳ではない。

「いえ、そうではなくて…」

そんな九一の言葉は彼の耳には届かないのだろうか。そそくさと先にドアを開けてはいつてしまう。その後には体を丸く縮めた熊が続く。「マジかよ…」

しびしび、と言った感じでそのドアの中に足を踏み入れた九一の第一声はこれだった。中はかなり狭いだろう、と思われていたのだが、それとは逆にものすごく広かった。

「こっちこっち！とりあえず診療用のベッドに寝かすからこっち来

なよ！」

その白衣の医者と呼ばれ、その方向に足を進める。緑色の照明のしたに、ベッドに横たわっている賢時がいる。よく見ると、熊はもういなかった。

医者はすでに診療を進めているのか、聴診器を胸に当てている。

「ふむ、これは単なるマナの過剰消費だね。一晚寝ればなおるよ。」

マナ…

その単語を九一は聞き逃しはしなかった。元々頭がよく回るため、だいたい予想はついていたが、一応質問を試してみる。

「すいません、そのマナ、って何ですか？詳しく説明していただけると嬉しいんですが。」

あくまで、質問。

「ん？君はマナが何なのか知らないのかい？見たところもう学校は卒業していると思っただんだが？」

不思議そうに首をかしげる。なるほど、この世界では小学校か、中学校でマナについての知識を学ぶのか。九一は少しだけ、この世界のことをわかったような気がした。だが、異世界から来たことは隠しておいたほうがいい。直感がそう告げていた。

「いえ、僕達は貧しくて学校に行けなかったので、マナについての知識は無いに等しいんです。」

苦しい。言い訳にも程がある、九一は言ったあとにそう思った。しかし、その医者は根が優しいのか、

「そうか、なんだか悪いことを聞いてしまったな。まあその話は忘れよう。そうだな、マナって言っても僕は説明が苦手だね。ふむ、小学校のときの教科書を持ってこよう。僕はそういうものは絶対にとっておく性格だからね。」

賢時と九一を部屋に残し、白衣の医者は2階に上がっていく。階段の軋む音が聞こえた。

「う…ラクか？ここは？」

意識を取り戻した賢時は九一に話しかけた。目は開いているが、焦点はあっていない。相当な量の体力を消費したのであろう。

「病院。お前あの杖持ってたからずっと遊んでたかと思えば倒れちゃつてよ。」

「え？杖？あれ杖だったのか？つてことはやっぱりエクスカリバーに並ぶ俺の相棒になることは必須だな！」

寝起きだというのに早くもはしゃぎ始めた賢時は一瞥した後、目をその杖に向ける。杖は今九一の手の中にあつた。

ガタガタ、という音と共に天井が揺れた。2階で何かあつたのだろうか。

「悪い、お前をここにつれてきた医者様が2階にいるみたいなんだが、何かあつたみたいだから見て来る。おとなしくしてろよ。」

そう言うと、2階に続く道を探そうと、さっき医者が出て行った扉を開き、進む。案外簡単に階段は見つかり、廊下の突き当りを進み、階段に足をかけた。その時

「うわああああああああああああああああああ」

医者者の悲鳴が聞こえた。間違いない、何かあつたのだ。その階段を素早く駆け上がる。医者のある部屋はすぐに特定でき、その扉を開ける。扉には亀裂が入っていた。

「大丈夫ですか?!」

あれだけの音がしたのだ。無事であるはずは無いが、一応呼びかけてみる。

「ヒヤハハ！大丈夫ですか、だつてよ！笑えるぜ！おい！見ろよ、こいつの顔。」

絶句した。部屋の中には3人、人がいた。

先程の医者と、金髪の少年、そして黒髪のどこか異国を思わせる風貌をした少女。

医者は金髪の少年に頭を踏みつけられ、うめいていた。血が出ているようには見えない。

「…くだらないわ。早く『消し』なさい。」

黒髪の少女は冷たく言い放った。

「ちよつとまってよ、消すつて…?!」

『他の皆さんを消しながら…』…なるほどな。

「うるさいな。お前は月裏九一、だな？そしてしたにいるのが逆地賢時。雑魚のお前から消しにきたんだよ。大丈夫、この世界で死んでも向こうに帰るだけだ。おとなしくやられやがれ！」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、金髪の少年はこっちに走ってくる。

武器…何か武器をつつ

そう思ったときには既に金髪の少年は九一の真下に走りこんでいた。「さっよなら〜」

ナイフが数本、下から飛んでくる。間一髪でそれを首を捻って避けると、カバンを掴んで廊下に飛び出した。中から銃を取り出す。

「これでもつっ！くらえ！」

部屋から飛び出してきたところを狙って、銃の引き金を引く。撃鉄の音

カチッ。

弾は出なかった。その隙を見逃さず、金髪の少年は手に持ったナイフで切るつと詰め寄ってきた。

何でだ？弾は出るはず…何か特別な何かがあるのか？俺にできないことなんて

あるはずがないよな？

九一の戦う本能が目覚めた。金髪の少年が突っ込んできたところを狙い、飛んでかわして少年の頭の上に着地する。そして、そのまま後ろに大きく跳んだ。並みの運動神経では出来ない芸当。いつもの九一なら無理だった。

着地の直後、銃を構える。ここまでの動作は先程と変わらない。変わったのはここ

「発射せよ！」ブーッ「br red」

弾が出た。それは少年の腕に直撃し、その腕を吹き飛ばした。金髪の少年の左腕は消え、肩からは血の滝ができていた。

「お、お前っ！な、何を…」

自分の無くなつた腕を見て、吹き飛んでいる腕を見て、九一を見て、恐怖の顔を浮かべた。

「そんな…何で…ぐ………」

そして何も言わなくなつた。さつきまでナイフを振り回していた少年はただの肉の塊となった。

「…九一、あなたは生かshとしてあげるわ。このお人形とは違うみたいなもの。ふふっ、今後が楽しみね。」

顔を上げると、そこにはいつの間にかきたのか黒髪の少女が立っていた。

「お前も死にたいか？」

銃口を少女に向けた、半分我を失っている九一はもはや誰が敵で誰が味方か、今自分は何をしているのかすらわからない状態だった。

「やだ、あなた私に勝つつもり？無理ね。私達はこのお人形と、少女は足元の肉塊を足でこづく。」

「2ヶ月前にここに来たのよ？私達は第3の世界からきた、って言われたわ。実力が違いすぎる。」

九一は何もしゃべらない。

「じゃあね、第4の狂犬さん 私はルーヴェ。また会う時を楽しみにしておくわ。」

そう言うと少女は消えた。何の前触れもなしに。

「…ふう。やっと行ったか。」

九一はほっ、とため息をついた。

九一は少女の話の中ほどから正気に戻っていた。自分の前にある肉塊を見たとき、この少女が殺った、と九一は思った。現にルーヴェは少年を『お人形さん』と呼んでいたのだから、そう思ってもおかしくない。

一階から賢時の呼ぶ声が聞こえた。あれだけ暴れたらな…と九一は思う。

狂っているな。俺もルーヴェも。

九一を呼ぶ声が大きくなる。

短い戦いは終わった。

Part 4：マナ（前書き）

登場人物紹介（その一）

逆地 賢時

ルックスよし、運動よしのある意味エリート。頭は極端に悪く、顔に似合わずドジ。幼稚なところがあるが、本人曰く「俺はいつでも子供の心を持っているんだ！」

月裏 九一

賢時の幼なじみ。幼稚園からの腐れ縁。賢時とは対照的に運動はあまり得意ではない。心の奥底に獣の心を秘めている。

レッグ・カルミニ

町医者。大人びた外見とは対照的に、まだ中学生。

Part 4：マナ

「大丈夫ですか？」

医者は目を開けたとき、そこには見知らぬ少年がいた、と思ったがすぐに思い出した。時計台の前でうずくまっていた少年と、もう一人の少年。

「ああ、大丈夫だよ。はっ、彼らは?!」

医者も賢時の代わりに乗せ、介抱していた九一はその『彼ら』が誰かをわかつていた。

「正しくは『彼女』です。あの金髪の少年は黒髪の少女に殺されました。あなたは部屋で倒れていたのですが…」

「いや、皆まで言わないでもいいよ。うん、体に支障はない。とりあえず君たちに本を持ってこないとな、後僕の名前はレッグだ。いつまでも『あなた』では気味が悪いからね。」

「はっ、と笑って再び2階に上がっていく背中を見送った後、地面に放置されている賢時の方を向いた。

「おい、いつまで倒れている気だ？」

「お前が俺をベッドから引きずり降ろしたことを謝るまで。」
レッグをベッドに乗せるため、賢時は九一の手によってベッドから地面に落とされた。

「九一君！ちよつと手伝ってくれないか？」

2階から九一を呼ぶ声が聞こえた。

「行って来る。おとなしくな。」

念の為、と釘をさしてから九一は2階への階段を上り始めた。

一応、死体は処分したし、戦闘の形跡も消した。疑問なのは、彼のナイフが銃に変わったところと俺達より早くこの世界に来た、という点か…

「ああ、ありがとう九一君。何せこの本棚は重くてね。」

二人がかりで部屋にあった本棚をどかして、裏にある収納スペースに手をつ込んだレッグはまさぐりながら、こう言った。

「君たちは文字も読めないだろうから僕が読んであげるね。」

「はあ、お願いします…。」

さつきから妙に機嫌のいいレッグは九一に友好的だ。

「確かここに…よし、あった!」

奥から引きずり出した教科書は既にボロボロで、本当に読めるのか疑問がでるほどだった。

パンパンと本を叩いた後、

「ふむ、まだ読めるから下に行こうか？賢時君、だっけ？地面に落ちていたじゃないか」

「いえ、あれは奴隷なんで。ほつといて大丈夫です。」

「え？友達じゃないのかい？」

「違います。奴隷です。地面で床を舐めさせて掃除でもやらせておけばいいでしょう。」

九一はたんと受け答えしながら階段を下っていった。

そんなことより早くしないと、さつきの奴ら俺達の名前を知っていた…。情報提供者がいるのか、それとも相手の能力なのか…。だとしたら、女の方の能力だな。金髪の方はナイフだったんだ。

「賢時くーん！あつたよ、本。」

レッグはボロボロの教科書を片手に賢時に駆け寄った。

「今から読むからよく聞いて頂戴!」

居間まで二人を連れてきてからそう言うと、レッグは教科書を開き椅子に腰を下ろした。

「えーっと、『マナとは世界の柱となり、大地を覆い、光となって皆に降り注ぐ全ての源。その力は親から子に、子から友に、友から大地にと流れる力。良く使えば善き力になり、悪しき気持ちの上で

使えば闇に染まる力となる。』…ここまで大丈夫？」

マナについての記述を読んだらしいレツグは顔を上げる。

賢時はすでにうとうととしていたが、九一は比較的眞面目に聞いていた。

「はい、まだそこまでは理解できませんが、あなたが出した熊みたいなものとか、僕の銃とかについて教えて欲しいですね。」

「はいはい。『召喚：マナを利用した式を用いて術者が想像し、創造した生物をこの世に呼び出すこと。ただし、召喚している間は術者は他の生物は呼び出せない。』後は、『式：正式名称は、神妙式マナを使用し、生物召喚や術を発動するための式。基本的は式は自らのマナに刻まれているために必要ない。』だね。ちなみに僕の召喚獣は、e n a^{エナ}だよ。僕は術を使えないからいつもe n aに頼りっぱなしだけど。」

「マナは誰でも持っているんですか？」

「ちよつと待って…」

パラパラとページをめくっていく。200枚程の量の教科書はこれだけで小中足りそうだ、と思うぐらい厚い。

「これだね。『マナはほとんどの人間が持っている。しかし、稀にマナを持たない人間が生まれてくる時があるが、そのときは寿命が極端に短くなるため、10年以上生きた人はいない。マナには属性があり、それぞれに使える術が限られている。属性の判断方法は<神の杖>と呼ばれる世界10神器を使うか、血液で判断される。』
神の杖は僕もしってるよ、持つとその持った人のマナに反応して、属性ごとの小さな術を発動させるらしいんだけど、今までどの国でも見つかってないから幻の物とも言われて…。」

まさか、賢時の持っていたあの…

九一はその話を聞くと、

「賢時！おまえの杖はどこにやった？あれだ！あれがその神の杖だ

！」

と、賢時に向かって叫ぶ。とうの賢時は半分しかあいていない目を擦りながら、

「やっぱりエクスカリバーじゃねえか！あれはお前が持っていたはずなんだけど…」

「何い？なんでそんな大事な物をほいほいと…」

九一は上着、制服のズボン…を手でまさぐる。

「これだ！」

ズボンの後ろのポケットに入っていた杖を出した。相変わらず、鈍い光沢を放っている。

「どうですか？これでしょう?!」

「…何で君が持っているんだい？それは今まで誰も…」

レッグは心底信じられないといった表情で九一の持つ棒を見つめた。瞬間、その杖の先から小さな紅い氷が出現した。

「うおっ、ラク！なんだよそれ。」

賢時はその氷をしげしげと見つめる。ちょい、と触ってみたり噛んでみたりして本物だと判断したらしく、疑問に包まれた顔をしていった。レッグはと言えば、賢時よりも驚いていて、

「それは…^{ヒューダー}huderの^{ブリード}breedじゃないか?!個人の持つマナの中でもレア中のレアだよ?三ツ星ランクのマナだよ?何で君が…」
もう何がなんだかわからない、と言った風でレッグは頭を抱えた。

「俺も！」

賢時は九一から棒をひったくる。すると、竜巻が現れた。

「レッグ！これはどうなんだ？」

その出てきた風の塊をレッグに見せ付ける。レッグがそれを見ると、「別に普通有能力。ただ、風の反応はそよ風が起きるくらいって教科書には書いてある…」

…つまり、賢時の能力は、

「風じゃなくて、『暴風』。redisenのurasun。僕はmedi、ただの…治療能力だよ。」

レディセン ウラサン

レグはすっかり自身をなくしている。マナについて聞かれたときはちよつとした先輩気分だったのであろう、その落ち込み方からわかった。

それにしても、大人にしては異様なほどの落ち込み方だった。

「一ついいですか？レグさんって何歳ですか？」

触れてはいけない空気を破ったのは九一だった。

「15だけど…君たちにはわからないよ。自分より下だった人がいきなり上になるときの気持ちは。」

『15！？』

九一と賢時の心の声がハモった。それほどまでに衝撃的だった。

「明日にはここを出るんだらう？家族も心配しているだらうし、いつまでもここに居るわけにはいかないだらうからね。」

レグはすっかりいじけてしまっている。

「じゃあ最後にひとつ、さっきからヒュー何とかとか、レデ何とかって言ってるけど、それって何？」

九一は汚名返上の機会を与えた。年下、と言う事がわかった故に少しレグを小馬鹿にはしていたが…

「神様の名前。この世を形作り、今もなおこの世をコントロールしていると言われている。それなら僕の得意分野だよ、ふむ。全部暗記してるから。たしか、26人で、『ader、berue、crono、deva、elue、firiya、gadan、huder、ide、juke、keiw、luna、monni、ned、oo、peck、que、redisen、sttor、tedec、unnoa、viou、we、xron、yeden、zero。』

アデア ベルー クク
フィリア ガダン ヒューダ
ケイ ルナ モンイ ネット
クイ レディセン スト テデック
ウイオウ ウィエ クロン エテナ
ウナナ

『ふむ、これで全部だよ？…あれ？』

二人は今度は固まっていた。自分より小さい子供が、複雑な5次方程式よりも難しい言葉を暗誦したのである。賢時のだらしなく開いた口にハエが入ったことにより、二人は正気に返った。

「いや、ありがとうございます。では、明日ちゃんとここを発ちますので。お世話になりました。」

「いいや、いいよ。大した事にはならなかったし。」

襲われたことすら大した事じゃなかったのか……。まあ新手が来る前に絶対出て行こう、早くて明日。

そう九一は心に誓った。

Part 5：前触れ

「では、お世話になりました。」
二晩、レッグの家に泊まっていた二人は三日目の朝、町のはずれまで来ていた。

レッグと言えば、薄汚れた白衣を着て二人を見送りに来ていた。
「もっと泊まってくれても良かったけどね。」

「いえ、マナの簡単な使い方を教えてくれただけでも幸いですよ。」
二人はレッグの家にいるとき、自らのマナを操作し、またそれを利用する使い方を習っていた。年下の先生、ということもあり賢時は渋々と言った感じだったが、二人ともマナの具現化と、能力の発動そして、『神』との契約ができるまでになっていた。

「じゃあ、これはお礼ということだ。」

九一がそういうと、賢時と九一は顔を合わせて、にいと笑った。そして、二人共手を空に向けた。

「『huder』よ、『redin!!!』」

「『redisen』よ、『stoma!!!』」

途端、九一の手からはとてつもなく小さな粒の霧が、賢時の手からは細長い風の棒が立ち上る。

それは、地から天に伸びるように風と霧が混ざり、交わり、飛散する。今もなお、出続けているその霧と風は、空に薄蒼い膜を作り出した。

「よし！成功！」

賢時は叫んだ。その膜は、太陽からの光を受け、霧で反射し、氷の紅と空の蒼、風の翠で世にはない色のアーチを作り出していた。

「……ここまで上達しているとはね。九一君に至っては大ききまで制御できるんだな……。君たちが神の能力をもっている理由がわかったような……気がするよ。」

そう言うと、レッグは後ろを向いた。

「さよなら、神の子供達。」

レッグは町の方に歩き出した。それが、別れの合図だった。

「さよなら！町医者！」

賢時はそう返すと、同様に町の反対側に向かって歩き出した。

ザクザクという土を蹴る音が生々しく靴の裏に響いた。九一のカバンでは二丁の銃が眠っている、賢時の腰には短剣が挟まっている、それこそが戦いに向けられた神の子の宿命をあらわしていた。

「で、これからどうする？もうあの町で襲われた以上、これから襲われないという確証はもてないからな。」

九一と賢時は町からかなり離れたとある森の茂みで切り株に腰をかけて話し合っていた。

「とりあえず、皆を探さないとどうしようもない。まあ先生は置いとくとしてだな、ラク。」

「うん、まあ先生は置いといて、誰がどこにいるかもわからないし、手当たり次第に探すしかないだろ？」

生徒を探す、という点に着目していた相談はだんだん論点がずれていく。

「先生がいたら襲ってくる命知らずなんていないだろうなあ。」

「まあ、先生がいたらそうだろ。そっぴや、携帯は使えないか？」

二人は自分の携帯を確認する、がここは異世界。携帯など通じる訳がない。

「アウト。」

「俺のも駄目だ。とりあえず、一番近い町に行こう。だとすると…」
九一はレッグから貰った全国版の地図を広げた。それを見た九一は絶句した。

「なっ、なんだこれは?!これはっ…!」

その地図は、九一たちがいた第三世界の地球、その大陸一つ一つがバラバラに配置してあるだけだった。簡単にいえば、地球の世界地図を破って、バラバラにつなぎ合わせたようなものである。

「なんなんだ…この世界は?ってことはこの世界もまた球状の星なのか?」

九一は一人でパニック状態に陥る。

「何をいまさら。こんなん襲われた時点で普通じゃないことがわかってるんだからギヤーギヤー言うなよ。今いた町が、デイマルだったから、次は…ここだな。海の町、『ルバニ』!」

そう言うと、さっさと地図を丸めて、歩き出した。賢時は常に風のマナを纏っているため、急な攻撃にも対応できるようになっていた。それ故に、賢時が前、九一が後ろの順番で歩くことになっている。

「先走るなよ、賢時。」

「わかってるよ、ラク。」

この言葉を何回交わしただろう?

それにしても…

この世界はどこか、おかしかった。

まず、土の色。少し青味がかかった茶色。

空の色、それは青ではなく、蒼色。

少しずつ、元の世界とはずれた世界。

九一はまたしても考え込んだ。

九一の遙か後方。

あれが『4th player』？なんだか頼りないね。
でも33人も来てるって話だぜ？

それにくらべて、『3th player』なんて10人、しかも
一人あいつに殺されたし。
そう言つて九一を指差す。

まあ一番大事なのは残ってるし、俺たち3人でも十分だと思う。
いや、でも『4th player』は超能力は持っていないにし
ても、他になにか特殊な能力をもっているとしたら？

様子見つてとこか。『千里一^リ望^ハ』の調子は？
万全。

『^{グラ・ドラ}無限世界』は？
いつでも。

じゃあ、次の町で。

三人は飛び散った。

Part 6：伏線

「おお！素晴らしきかな、港町ルバニ！」

賢時は町を一望できる丘に登るとそう言った。両手を広げ、空を崇める様に体を反らす。

「まあまだ町に入ってもいないがな。」

九一は冷たくいいはなつと、丘の斜面に腰をかけた。

「で、この町の目的は？お前のことだから忘れているだろう？」

九一は手帳を開きながら言う。元々几帳面だった九一は鞆のなかにしっかりと日用品をいれていて、その中に手帳もあった。

「クラスの皆搜索に宿の確保、通貨の確認、だろ？この俺様の頭脳をもつてすれば……」

「それと、ついでに先生の搜索も。まああの人は一人生きて行けるとおもっけど。」

被るなよ！と言い、ハハハハとひとしきり笑った後、落ち合う場所の確認をした。

「貰った地図だと、港の船の発着場は3つあるそうだから、この発着場にしよう。」

「でもそのでもまだ広いから迷わないか？」

「じゃあこの裏路に入ったところだな。2時間後に集合だ。」

「OK！じゃあ俺先いつてくるぜ！」

そう言うと、賢時はものすごいスピードで去っていった。

やてと…

「そこにいるんだろ？出て来い。」

九一は振り向くと、森に向かって話しかけた。

「なんだ、バレてたのか。」

誰もいないはずの森から出てきたのは赤髪の少女だった。背格好は九一とかわらないものの、表情は険しい。

「じゃあ、こっちが何人かもわかってるよね。まあ関係ないけど。」
そう少女は言つと、懐から小さな瓶を取り出した。

何か来る…

九一はそう思い、銃をとりだし身構える。

「ばいばい！」ケラ・トラ『無限世界』」

なっ…

九一はそこで意識を失った。

「そっれにしてもさすが港町、海の匂いがするぜ…」

九一が今どうなっているかを知らない賢時は鞆を振り回しながら、夕暮れの港町を歩いていった。

「でもこれといって誰もいなかったからな。早く待ち合わせ場所に……」

その独り言は途中で止まった。賢時を覆う風のマナが激しく震えた。

誰か…視てるな。それもかなり殺意が籠ってる…

空気の振動はあらゆる波動を伝えるものである。

音、光…それは感情もしかり…だ。

レッグの言った言葉を思い出す。そして、この波動は殺意。賢時のマナ、『ウラサンUrasun』はその波動を感じ取り、さらに脳に直接それを伝える。

強力な殺意、それに気づいた賢時は待ち合わせ場所に向かって走り出した。肩越しに後ろを見ると大柄の男と小さな女で二人、自分を追っていることがわかる。しかし、その姿はすぐに遠のいていった。

?！遅い。何故…

そう思った時、もう目の前に待ち合わせ場所は見えていた。

「よしっ！」

「勝った？」

賢時は驚いた。九一との待ち合わせ場所、そこには女二人に男一人しかも、九一の姿はなく、男と女一人にはさつきまで自分を追いかけていた奴

「お前等…誰だ？」

賢時は冷静に問いかける。その間にも、賢時の頭の中では九一の最悪のシミュレーションをしていた。待ち合わせ場所に時間通りにこ

ない九一は初めてだった。

「『3th player』、とえばいいかな？」
赤髪の少女が答えた。

賢時は、何だそれは？と聞こうと口を開いたとき、その言葉が口から発せられることはなかった。

「『クラ・ドラ無限世界』！」

賢時は、その場から消えた。

「ほいつ、後頼んだ。」

そう言うと、赤髪の少女は持っていた瓶をもう一人の少女に向かって投げる。

それを少女はうまくキャッチすると、

「人使い荒いよ…本当に。じゃあぱつぱつと終わらせるね。『千里^ル一望^ム』！」

途端、少女の目は黒色から、淡い茶色、そして橙へと色を変えた。そのまま、瓶の横から中を覗き込む。

「発っ見っ！」

賢時と九一は、瓶の中にいた。

Part 6：伏線（後書き）

ぶっちゃけた話見てる人いるのかな…

呼んだ人は評価しといてください。作者の気分が良くなります。

Part 7：レポート

「ここ…は…？」

賢時は、何も無い虚空の世界で目が覚めた。あの時と同じ、この世界に来たときの暗闇。そして、やはりと言うべきか一筋のひびそこに向かつて賢時は手足を動かす。右手、左足、左手、右足。泥を進む感覚。

後、後一掻き

その出口、ひびの前に小さな光が現れた。

「アナタハダアレ？ワタシはイヴ。アナタハダアレ？アナタハアダム！」

節をつけて、それは歌うように賢時に語りかける。賢時もまた、
「俺は…俺は…誰だ？」

賢時は手を動かすのを止めた。足を動かすのを止めた。
ただ、ただ目の前にあるそれに触ろうと手を差し伸べた。
「アナタハ…ゼロ。」

ひびが割れ、賢時は堕ちていった。

ゼロノダテンシ
ゼロの墮天使

そんな言葉があたまに響いた。

「賢時！」

ガバツ、と賢時は跳ね起きた。自分の手で顔を触る、足を触る、手を触る、九一を

「何やってるんだ？お前気でも振れたか？」

賢時はハツと我に返る。

「…ッゼロ……」

「ぜろ？」

九一は様子のおかしい賢時の顔を覗き込む。しかし、その顔すら目に入らないほど賢時は動揺していた。

ゼロの墮天使……

ぶんぶん、と賢時は首を振った。あれは夢だ、夢なんだからゼロがどうこうとか関係ない。賢時はそう自分に言い聞かせる。

そこでやっと、自分の置かれた状況に気づいた。

「ここは？」

「たぶん、どこかの閉鎖空間。あの赤髪のやつが何かやったんだ。」

九一は悔しそうに唸る。文字通り手も足も、拳句には言葉すら出す前に自分はやられた。

そのとき、

『発つ見〜!』

という頭に響くような音がした。賢時は思わず耳を手でふさぐ。

その音は自分たちの頭上から聞こえた、と九一が気づいた。慌てて、賢時も頭の上を見上げる。

そこには、人の顔を思しきものがガラスで歪んでうつっており、茶色のコルク栓のような物が見えた。

九一は閃く。

「賢時、あれだ。あの栓を吹っ飛ばせ。」

九一は何とか無事だった片手銃を鞘から取り出すと、二人は同時に唱えた。

『huder!!!』

『reddisen!!!』

途端、九一の拳銃は紅い氷気に包まれ、賢時は荒れ狂う風に包まれた。

「同時に狙うぞ、微調整の援護はできないから全力の奴をぶつける。

いいな?!」

「っ了解!」

九一はコルク栓に銃口を向けた。鈍く光るその口はまるで血を喰らう獣のように紅い液体が垂れる。

『breed!』

『sutoma!』

九一の持つ銃からは紅い氷の塊が、賢時の掌からは巨大な風の棒が立ち上る。

それは、同時にコルク栓を叩いた。

ポン！と言う歯切れのいい音がした。
そこで、またしても二人の意識は消えた

同時刻

「発っ見〜！」

橙の目をした少女は瓶の中を覗き込んでいた。

「じゃあまず分析から始めるね。」

そう言うと、少女の目の色は橙から綺麗な朱色に変わった。

「分析開始。悪意、ゼロ。殺意、ゼロ。敵の可能性 ゼロ。分

析終了します。」

その時、瓶の栓が…

ポン！と言う音がして栓が跳んだ。

「じゃ、後よろしく。」

そう言って少女は手に持っている空の瓶を赤髪の少女に渡すと、近くにいた大柄の男に駆け寄り、

「空虚促翼！」

二人は消えた。

「…はあ。」
一人残された赤髪の少女は気を失っている二人の少年と、自分とを見て大きくため息をついた。
「どうすんのよ？これ。」

賢時と九一は同時刻に目が覚めた。二人は起き上がると、まず、上空を確認した。
広がるのは

『蒼い…空！』

出られた、というよろこびが二人を覆った。

「よろこぶ前に、ちよいといい？」

二人が振り返ると、そこには赤髪の少女がいた。町のはずれだろうか？緑の絨毯の上におかれた切り株に腰をおろしている。

九一は素早く銃を出し、賢時は手を前に突き出す。
「違う違う。閉じ込めるなら最初にやってるって。ちょっと話があ

つてさ。」

その声に九一は銃を降ろした。賢時は九一にならう。

「何だ？友好のあいさつか？」

賢時はへへん、と鼻でわらう。

「その通り。」

『へ？』

「だから、私たちと組まないかって言ってるの。逆地、月裏。赤髪の少女は以前、無表情な顔を崩さない。」

「話は聞くけど、最初の挨拶がこれじゃあ無理があるな。」

そう言うと、賢時は瓶の形に手を動かす。明らかに皮肉がこもっている。

「同感だな。何故最初からそう言わなかった？」

九一は皮肉こそないものの、言い方は冷たい。

二人はそう言うと、赤髪の少女に背を向けた。そして、町の方向に歩き出す。

「この世界の。」

二人は振り返る。赤髪の少女は晒った。

「この世界の情報と引き換えにさっきのはチャラで。」

赤髪の少女は元の無表情に戻った。もっていた三角鞆から、レポートを引っ張り出す。その題名には、

『Dream World』

と描かれていた。

「話だけなら。」

九一は少女の正面に腰を下ろした。

「聞いてもいいけど、その情報つてのが先だね。」

九一は言いながら振り返り、賢時を見る。

賢時はどうしようか迷ったが、九一の目を見て、決断した。

「じゃあまずこの世界からね。」
赤髪の少女は2度目の冷たい笑みを浮かべた。

Part 8：仲間、敵（前書き）

登場人物紹介（その二）

シータ

赤い短い髪が特徴の女の子。

賢時達と同じ年だが、それほど体は大きくない。
常に後ろ向きの考えで、無表情。

デルタ

シータの友達。同じ第3の世界から来た。

透視能力をもっており、それは物事の本質を見抜いたり、遠くを見たりする。

シータとは違い、明るい性格だが、臆病。

アルファ

2人と同じ年だが、身長が半端なく大きい。
能力は瞬間移動と身体能力の増加。

Part 8：仲間、敵

「……………そんな馬鹿なっ！そんなことが……………」
九一は絶叫した。

賢時は地面をこぶしで何度も叩く。
青色と茶色と血の赤が地で混じる。

「そう、だから私たちは……………」

仲間を作るの。

遡る事20分前

「じゃあまずこの世界からね。」

そう赤髪の少女は言った。

「話す前に二つ、私の名前はシートタ。第3の世界からのプレイヤーよ。さっきの二人は女の方がデルタ、男のほうがアルファよ。後々また顔を合わせることになるわ。それと、これから話すことはまだ

私たちのグループと貴方達だけの秘密となるけれどもそれでいいわね？」

淡々と『説明』を行った後、確認をとった。

賢時と九一は顔を合わせ、うなずいた。

「いいわ、じゃあ話すわね。」

「つまり、話をまとめると……………」

この世界はすべての世界とリンクしていて、何かしらの法則にしたがって向こうとこつちを繋いでいる。そして、その情報はシータの仲間の一人、ガンマの能力であること。この世界での死、は向こうの世界の死を意味すること。シータ達の能力は超能力と呼ばれる代物であること。そして

第2の世界からのプレイヤーの能力が、『ヨハネのひみつばし想像の創造』であること。その『想像の創造』はこの世のすべての法則を無視した絶対の無敵であること。

そう、それは……………

無から有を作り出す。

「でも、それは、その第2の世界からのプレイヤーがそんな絶望的な能力の持ち主だったとしても、仲間になれば…」

「無理よ。彼はまだ8歳の子供だもの。」

「まだ話してもいないのか?!」

「話したわ。」

え?、と九一は思わず聞き返した。

「だったら…」

「消された。」

「え…」

「彼に会った4th player 5人がまとめて消された。それも私たちの仲間の能力でわかったこと。」

4th player………

「おいそれって……………」

賢時は身を乗り出す。

「そうだ、俺たちの方の…だ。」

九一は顔を歪めた。

「名前とかは分からないのか？」

賢時はシートに向かつて言った。できれば、わからないと言って欲しかった。

「私のその仲間に会えばわかるはずよ。」

そんな賢時の心境も知らず、シートは答えた。

「そうか……………」

賢時は僅かに頭を垂れる。

「で？」

で？

「で？つて何が？」

賢時は何が？と言った風で答える。

「仲間になるか、ならないか。さっき言っていた二人も来ているぞ？」

九一は心底付いていけない、と言った様子で言った。よく見ると、さつき賢時を追いかけていた二人が九一の後ろに立っていた。

大柄の男がアルファ、身長180台を越える賢時よりも遥かに大きい。その横に立っているのがデルタ、身長はアルファの肩にも満たない。手の中では小さな黒い球体を弄んでいる。

「二つ聞いていい？アルファの身長と、その黒い導火線がついてて爆弾ですと自己主張している物体なんですが？」

賢時はおそろおそろ、と言った調子で聞く。

アルファは腕を組んだ。

「206だった。一ヶ月前の話だ。」

「にひやく……………」

「元の世界で成長促進実験のモルモットやってたからな。この身長だ。」

アルファは淡々と答える。その顔には僅かに笑みが浮かんでいる。

「初対面で聞かれているのには慣れていますが、それほどまで驚く奴は初めてだ。」

「いや、モルモットって……………」

「実験動物。俺は試作品の成長促進の薬を打たれた。おかげで元の寿命が半分以上縮んだ。」

それでも表情を崩さないアルファはむしろ不気味だった。

話が区切れた、と思ったのかデルタが続いて答える。

「で、あたしのコレね。コレはうん。爆弾。特製の。」

またしても賢時は聞かなければ良かった、と思った。

「ああ。大丈夫。火いつけなければコレ爆発しないから。」

それでも怖いんだけど。

賢時の中で今会った3人の印象が確定した。

「で？仲間になる？ならない？答え次第で私たちは直に他の人をさ

がすんだけど。まだ3 t h p l a y e rを全員集めたわけじゃないし。」

シータは切り株から立ち上がり、服の襟を整えながら言った。制服なのか、3人は3人とも同じような服を着ている。

「どうする？ラク。」

賢時は振り返る。

「後、まだ問題が一個あるのよ。」

答える前にシータは言う。

「何があっ……」

賢時の言葉は途中で吞まれた。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

賢時の後方 港町ルバニで爆撃音が起こった。僅かに残る反響音にその場にいた5人は耳を塞ぐ。

「これが、その問題。この世界に入った時からなぜか狙われているのよ。」

首を竦めたシータのその言葉が終わった後、5人のいる場所は黒い影に覆われた。

「離れて！」

その言葉が言い終わるか終わらないかのところで、5人共に4方に跳んでいた。

少し離れたところに着地すると、元々5人がいたところに巨大な人とは言いがたい肉の塊が落ちてきた。

体中に銀色の鎖が巻かれ、上半身は剥き出しになり、ところどころに切り傷があった。中でも印象的なのは、その左腕にあたるだろう場所にその腕が無かった。

その巨体が僅かに動いたか、と思うと右腕が九一と賢時のいる場所に向かって伸びる。

それを2人はまたしても横に跳んでかわす。

「なあ、ラク……」

賢時が呟く。

「俺とお前同じ事を考えていると思うんだが。」

ああ、と九一は答えた。

『俺たち運動神経めちやくちやいい!』

賢時と九一は同時に叫んだ。

影から逃れたことといい、この謎の巨人のパンチをかわした事といい、地球にいたときよりも身体能力が格段に上がっていた。

「逆地!月裏!」

シートが巨人を挟んだ反対側で叫ぶ。巨人の攻撃がシートに集中しているのか、少し息切れ気味だ。

「何だ!」

「こいつを攻撃しろ!今の私たちじゃあ止められない!」

よく見ると、アルファが巨人の攻撃を必死で受け流していた。後ろでシートが肩を抑えている。

「合点!『huder』!」

九一が素早く出した片手銃は早くも赤みを持つ氷気に覆われる。

「賢時はアルファのサポート!俺がメインで殺る!」

そう言うと、九一は巨人のわき腹に向けて、銃を構えた。

「『breed』!」

巨人のわき腹からは逸れたが、その大きな背中に尖った紅い氷の塊が突き刺さる。

その痛みに反応して、巨人は九一の方向を向いた。正面から見るのは初めてだが、その顔は肉に埋まっており、よく見えなかったが目

る。詠唱も間に合わない、足も動かない。九一と賢時も間に合わない。

アルファは…

「嫌あああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

死んだ。

Part 8：仲間、敵（後書き）

本当に読んでくれてる人がいるのか心配になってくるこのころ。
早速死んでしまったアルファ…
ごめんなさい。

賢時は両手に風の刃を纏った。

「俺も異常になる。」

低く身を沈め、サイコ・キラの喉元に躊躇い無くその拳を叩き込んだ。交差するその両腕が赤く染まった。それはサイコ・キラの血ではなく、

「がああっ！」

賢時の血だった。その血は右の肩からサイコ・キラに向かって噴出していった。

「だから温いと……」

そこに黒い光線が飛んできた。サイコ・キラは後ろに下がり、避ける。光の速さで飛んでくる光の光線を避けるのも並みの業ではできない。

すかさず賢時が残った左の腕をサイコ・キラに向け、

「ストマstoma！」

その掌から風の柱が突き出される。極限まで細くされたその風はもはや槍であった。また、右肩を庇いながらその右の掌からも風の柱を打ち出し、後方に飛ぶ。

「させ……」

その逃げるようにして飛んだ賢時に追い討ちをかけようと前に踏み込むが、それ以上に進めなかった。またしても黒い光線が飛んで来たからである。

「ちっ……！」

ヒュツと風を切る音と共にサイコ・キラはその残った剣を投げた。それは真つ直ぐな軌跡を描き、賢時に突き刺さる。

それは1センチ程突き刺さるが、すぐに氷の弾丸によって弾かれ傷と言った傷は与えられない。サイコ・キラは長めの髪を横に振り、九一たちがいる方を向くが誰もいない。仕方なく、足元にあるもう一方の剣をもって走り出した。

その左肩からは鮮血が流れ出す。
すぐにその足元に氷の弾丸が打ち込まれるがサイコ・キラは微動
だにせず走り続ける。

「凍結せよ。」

サイコ・キラの足が凍った。両足がもつれるように固まり、転が
る。

「なっ、何が！」

「久しぶりだね。サイコ・キラ。」

顔を上げて、そこに立っていたのは

「エ…エレミ」

ザシユリ、という音と共に右腕が飛んだ。肩から下が消えている。

「悪いがお前が俺の依頼品なんだ。おとなしく消えてくれ。」

「ちよつとま」

「さようなら。」

そのサイコ・キラに向けられた掌。そこに書いてある文字を見て
絶句した。サイコ・キラは目を瞑る。

サイコ・キラは氷に包まれた。

「はあ、はあ。何だ？」

九一は普段走りなれていないのですぐにサイコ・キラを見失う、
が何故かその足は途中で止まった。デルタとシータはアルファの元
へと行っているのでサイコ・キラを追う人は九一しかない。

「足に…」

九一の足には氷の蔦が絡み付いていた。地面に根を張るように伸び
ている氷は簡単には取れそうにはない。

一応、と銃の底で叩いてみるが割れることも無い。

「まさかここで使うとはね。」

実弾。氷の弾は無尽蔵でタダだが使えない場面も出てくるだろう、
と予測してレッグにもらったものだが、早くも使う場面に出会っ
ていた。

カチャカチャと銃に弾を詰め込む。その間にもサイコ・キラは逃
げているのだ。もたもたしてはいられない。

全部で12発、詰め込み終わると直に足元に銃を向けた。引き金に
指をかける。少しでもずれたら自分の足を貫くことになる。ここま
でシビアな場面になるとは…と自嘲気味に口の端を上上げた。

カチン。

音がした。それは引き金を引いた音ではない、氷で物を固めたとき
の音である。

瞬間に足の呪縛が解けた。実弾を詰め込んだまま音のしたほうに向
けて走り出した。

そこには大きな氷の塊と空色の髪の男。歳は九一と同じくらいだ。

「お前…何をして」

「ごめんね。九一君。でもこうでもしないと僕の命が危ないんだ。」
「!?!」

この男は自分の名前を知っている。

すぐに銃を構える。片方は実弾入り、もう片方は能力の為のもの。

「君は何を望む？」

「うるさいな。」

引き金が引かれた。氷の弾と鉛の弾が一瞬にして男を打ち抜く、はずなのがそれは弾かれると九一の足元に転がってきた。

狙ったはずの胸と額は氷の膜が張られていた。

「お前は……」

？、と男は首をかしげる。

「何者だ！」

Part 10：炎と風と

「お前は…何者だ!」

「すぐに分かる。僕と君は同種だからね。」

どうする?こいつは銃から射出された弾を氷の膜だけでとめた、
と言うことは銃で傷つけるのは不可能。だとすれば基本が肉弾戦に
なるがおそらく体力的にはこちらが圧倒的に不利。

考える 考える 考える 考え…

「何だ。簡単なことじゃないか。」

?、とまたしても男は首をかしげた。その表情にはまだ余裕が残っ
ている。

「銃?肉弾戦?俺は何を考えていたんだ?」

簡単だ。

「お前の周り、今人の気配は何個ある?」

こいつをふんじばる。

「気づいたか?」

サイコ・キラーにも聞くことがある。

「仲間…だよ。」

「なっ…」

「どっせええーい!!!」

瞬間、風を纏った拳がアイズの立ち位置に叩き込まれた。

アイズはそれを氷を纏った手で受け止めるが、物理的な衝撃は受け止めても周りの空気の流れまでは受けきれない。

暴風にさらされたアイズの体は遙か後方に吹っ飛んだ。衝撃を氷で吸収するも、受身を取れなかったその体制ではダメージは少ししか軽減できない。

「があっ！」

今まで冷静だったアイズの口からは嗚咽が漏れる。風の刃による二次的な反動で、腹にも傷の様子が見える。

「『千里一望』」

後ろ向きに背中を地面につけるように倒れていたアイズの頭に柔らかい感触が走った。

アイズはすぐさま前転をして、その感触から逃れようとするが既に遅かった。

「あなたの弱点…見いつけたっ！」

前転しつつ、そのまま後ろを向いたアイズの目の先には…

「このデルタの能力…戦闘向きじゃないんだけど…」

消え…

立ち上がって3メートルほど距離をとったアイズの横腹…そこに鈍い衝撃が走る。

「がっ…」

「私は戦闘向きなのよっ！」

彼の立っていた場所のすぐ横、そこには腕をピンと伸ばしきったデルタがいた。

草原を転がるようにしてアイズはまたしても吹っ飛ぶ。半ば、回転気味の体の運動で傷口から血が飛び散るようにもれた。

運が良かったのか、否か。草原の端に行き当たり、その体は転がりながら森の中に消えていった。

ガサガサ、と言う音がした後黄色い塊のようなものが森の入り口に

走った。追いかけてきていた賢時とデルタの足が止まる。

瞬間、まるでその2人を足止めするかのようには勢いのある炎が入りに立ち上った。すんでのところでは賢時は風を使ってなぎ払う。

だが、その炎はなるで操られているかのような動きで風の拳を避けた。森側にへこむ様に曲がった炎は拳が過ぎ去ると同時に元に戻る。何度やつても同じだった。

「なんだ？これは……」

賢時は思わず声を漏らす。

「炎……なんだけどねっ！」

デルタも駄目元で炎に触れない距離で拳を打つが、所詮人間の肉体。少しだけ炎が揺らぐだけだった。

「マジでなんなんだよ……」

賢時とデルタはただ立ち尽くすのみだった。

「どうだった？」

サイコ・キラの入った氷を少しずつ削っているシートと九一の元に2人は帰ってきた。

アルファの死んだ悲しみがまだ抜けないのか、シートの目は真っ赤になっており、デルタも例外ではない。

「見ればわかるだろ？」

賢時は心底うざったそうに言った。肩をすくめるようにして、両の

掌を空に向ける。

「まあ炎が見えた時はだめだなあ、とは思った。」

九一は手を休めることなく氷のナイフで氷を削る。

「アルファは？」

賢時はシータに聞いた。聞いてはいけない、と思っけていても聞いてしまふのが人間なのだ。

「…ない。」

「は？」

シータの意味不明な答えに賢時は顔をしかめた。

「いない。」

「まあそれはそうだろうけど…」

ドン、という音が走る。シータは手を握って、賢時の腹にその拳を打ち込んでいた。傷口が、傷む。

「いつてえ！何する…！」

もとより大怪我だった賢時は目を吊り上げる。レッグからもらった応急的なポーシヨンとやらで手当てをしているため、血こそでていないが、痛いものは痛い。

「消え…ちゃった。」

腹に拳を打つ込んだはずの体は賢時の方向へ倒れこむ。丁度、シータの体を抱くような姿勢。

「アルファが…消えちゃった。」

泣いているのか、顔が見えないが肩を震わせるシータを見て、わけがわからない、と言った風にデルタのほうを見る。

「消えたのよ。切られたはずのアルファの体が。」

デルタは泣いていない。説明、と言った感じで賢時に話した。

九一も目を伏せる。

意味はわかる。

が、賢時にはシータの肩を抱くことはできなかった。

いろいろあつたが、とりあえず話をまとめようと言うことで一向はルバニに戻った。

宿屋の一室で4人は話し合う。

「えっと…話をまとめるとだな。」

九一はメモ帳を見ながら、箇条書きの状況を話した。

1：デルタ達の他の仲間である残りの7人のうち、1人死亡、4人行方不明、で2人がとある町で待機。

2：4日前に開かれた（賢時一行の到着3日前）世界一の酒豪を決めるルバニの恒例の大会に、無名の女性に参加、優勝賞金の1000ひゃくまん万Nを靴に、商品の酒1年分を荷車に積んで、去っていったということ。（絶対に先生と確定事項。）

3：とりあえずサイコ・キラの捕獲（死んでいた）により、礼金が出たため、これからの旅に支障は無いだろつということ。

「で、仲間になるかって話だけど…」

シートはまだ話せる状態ではないため、デルタが代わりに話す。

「むしろ仲間になれ？って言うか？」

確かに女の子（？）2人の旅は危ない、と思うが自分たちは仲間の搜索を一番にしなければならぬ。

「先生はイルトラノム…この国から出て行くためにここから北のりバルストって言う国に向かったらいいんだけど…」

九一は世界地図を開きながら言う。

元の地球の北海道に当たる部分にイルトラノムと書いてあり、その北にはユーラシア大陸ほどの大きな大陸が広がっている。陸続きなのか否か、地図では確認できないほどに近い。

「なら大丈夫よ。私達の仲間…待機中のやつらはリバルストの『バラン』にいるから。」

デルタの指が地図上を走り、リバルストの国の東端の出っ張った部分でとまる。元の地球で言う『朝鮮半島』の部分だ。

「だったら…なあ？」

賢時は前にいる九一の肩を叩く。

「ああ。」

3人は打ち合わせることもなく拳を握り、机の上にかち合わせる。

「シート。」

デルタは呼ぶ。

恐る恐る、と言った様子でシートもゆるく握った拳を机の上にした。

「…目指すはバラン！！」「」

その日の宿は夜中まで明かりがついていたとか。

Part 11：新たな刺客

「なあ。ラク。」

「ラクと言っな。なんだ？賢時。」

賢時、九一にデルタとシータを加えた4人の一行はアルファの遺体が埋めてある地点に立っていた。

そこには元のアルファの身長程もあるうかの紅い氷の塊と、その傍らに立てかけてある水色の澄み切ったようなトンファア。

形見にと、4人が持っていたのはアルファの黒い髪の毛だった。

それぞれが思い思いにアルファの墓標の前に立ち、1人1人言葉を零して言った。

「誰を恨めばいいんだ？」

賢時は心底悔しい声で言った。現実を見ているのは誰しも辛い。

「さあな。」

シータは泣かなかった。

リバルスト

古くからイルトラノムと対立状態にある国で、国の境界線では小競り合いがしばしば行われている。面積は広く、イルトラノムの10倍ほどの国土を誇るが、対照的に国民の数は少なく、イルトラノム

より少々多い程なので、軍事力で言えば世界では五本の指には収まらない。

一年(この世界では220日)を通して、その半分を氷に覆われる領地では畜産業がさかんとなっている。

その広い広い領地の東端。そこに目指す町…ババランがある訳だが…

「ここは何処だ？」

イルトラノムとリバルストの国境を越える際、デルタ達が来たときはアルファの能力 瞬間移動で問題なく入れたのだが、今回はかりはアルファはいない。

そこで、仕方なく正面突破に走る4人だったのだが、流石はトラブルメーカー。

賢時は国境付近の樹海でしつかりと迷子になっていた。

「うう、俺は左だと思っただのに…くそっ！」

そもそもは…

「あそこが…国境の門なのか？」

九一は目の前にそびえる何とも無駄に大きい門を前に口を開いた。

「たぶん…行きはよく見なかったけどね。」

シートもその横で言った。門の前には賢時一行と、門番のつもりだろうか？もはや軍隊の量の兵士。

兵士の装備は量に違い違わずにも重装備だった。

鈍い光を放つ銃口を上に向けたアサルトライフル、イルトラノムの紋章であるのか銃身に刻まれた獅子の絵、体に着込んだ帷子のようなジャケット…

いかにも軍人です、と言った装備だった。それに対し、

「正面突破は不可能に近いな。」

九一はぼそりと零した。

確かに、その門に対する警備は厳重だった。ただ、裏を返せば…

「横からなら大丈夫だな。」

賢時の言葉に九一とシータ、デルタは頷く。

「じゃあ、1、2の3で行くぞ。」

九一は言うど、実を低く屈めた。

「1、2の…」

「3!」

バツ、と4人は走り出す。

右に3人、左に1人…

と言うわけだった。

悲しきかな、馬鹿の運命。

でもってその頃のその他3人…

「あつの馬鹿が！何でこつちにこないんだ?!」

九一は怒り奮闘と言わんばかりに叫んでいた。

「まあ普通は月裏に付いていくもんだと…」

「私も…月裏君が。」

デルタとシータが賢時に追い討ちをかけた。

当の本人は何処にいるのか、目星もつかない。

「くそつ！せめて目印でも…」

その時。

その声が賢時に届いたのか否か、

スピュン

と言う音がして、九一の頬が切れた。

何事？と九一が振り返る前に

「無限世界！」
クラ・ドラ

「『レディセン Reddise』」

「

「サンキュ。シート。」

他の3人はと言うと、

おそらくは警備隊に見つかったであろう3人をシートが人間では追っつてこれないある種の独立空間に送ったのである。

「ん…逆地君発見。」

まるで晝盤の目のように張り巡らされた床を歩いていると、ビデオ映像のようなビビ…という雑音の聞こえるエリアに出た。

そこには何故か沢山の騎士に囲まれた賢時の姿。

九一は首を一回だけ、ぐるりと回すと

「行つてやるか？」

「『stoma!』」
ストマ

右腕に細く尖った風の剣を握ると、それを勢い良く前方に突き出す。轟！と言う音がして、騎士の半分が吹き飛ばされる。

直接賢時の刃に触れたものは鎧がズタズタに引き裂かれ、宙を舞った。

「こつ、この野郎！」

後ろに回りこんでいた騎士の1人が槍を賢時の頭に深々と突き刺した：

と思うと、その体は目に見えぬ力によって後ろに吹き飛ばす。

賢時の握る剣の柄から後ろに向けて風の槍が突き出しているのが見えた。

「『huder』」
ヒューダー

残る騎士が横から吹っ飛ばす。

そこには片手銃を右手に持った九一と左腕を宙に突き出しているデルタ。

「『breed』」
ブリード

僅かに残る少数の騎士もまた同じくして吹っ飛ばす。

「つたく。早く来いっての。」

ガッン、と賢時と九一は拳を突き合わせる。

「温いなア？テメえ等！」

4人は素早く声のしたほうを見るが、誰もいない。

「遅せエんだよお？雑魚どモガあ？」

そのひょうきんで少し抜けたような声は九一の背中越しに聞こえた。
「なっ…」

「遅イ」

九一のわき腹に鈍い痛みが走った。

Part 12：それは必然？

「このっ！」

そう言いながらデルタは拳をその男に向かって突き出した。

間一髪、拳は男の耳の辺りを掠める。

顔を覆っていた仮面が半分だけ、ポロリと剥がれ落ちる。

「あれ？」

その顔に見覚えのあるような気がした賢時だが、そんな事を考えている暇は無い。

最近敵多いな…

賢時はボソリ、とそう思った。

「『stoma』《ストマ》！」

風で象られた剣を構えると、

「俺の仲間に手を出すな。」

横に一閃。

それは丸められた新聞紙のように伸びると、仮面の男の右足にあたる。

宙を舞う木の葉を切り裂くその刃は足を切り裂いた…かのように思えたが、それは穿いていたズボンを掠めただけだった。

「まダメだア！」

着地した仮面の男はその手に木切れを握って賢時の懐にもぐりこんだ。

「奇泉 『雷来功』！」

仮面の男が振り上げた木切れが賢時の腕を掠める。賢時とは僅かに腕に痺れが走るが、気にせず風を斬る。賢時は反撃を行う。

「奇泉 『風来功』！」

その風の剣は風を纏う木切れによって防がれた。予想外の展開と反撃に賢時はバランスを崩す。

ふらついた右足を狙うかのように、

「奇泉 『電来功』！」

賢時の足はそこで固まる。

「っデルタア！」

かろうじて搾り出したその声は仲間には届かない。上半身だけで振り向いた賢時の目に映ったのは、

「嘘…だろ？」

10人ほどの仮面に囲まれた自分達だった。

「……………」

「
…
」

小声で何やら話しているが、賢時の耳には届かない。

ただ、その足にまわり付く氷をどうしようか、と言つ思考で一杯だった。

「ケツテいだ。ケンとき。」

?!、と賢時は振り向く。話しかけてきた仮面の男は今なんと
言つたか？

「お前つ…」

するり、と仮面を脱ぎ、顔をあらわにした男は言つ。

「久しぶり!」

「…順？」

その時、時は止まったと少年は後に語る。

「順も人が悪いなあ？おい。」

賢時は半分キレ気味に順、と呼ばれた少年の頭を押さえつける。

「いってて。悪いって言ってるじゃないか?!」

賢時を含む4人と遭遇した集団、その中にクラスメートがいた、とならばまだ分かる話なのだが、逆で、賢時達が遭遇した集団を作ったのがクラスメートたちだった。

「とりあえず、紹介から入ると…」

九一が仕切ってデルタとシータを自分の仲間を紹介した後、
一列に並ぶクラスメートに対し、

「右から紹介して…」

「俺の名前は池谷 司。つかさだからツツチー、とでもよんでくれ。」

「いや大柄の少年がハハツ、と笑いながら言った。」

「でもって、俺が江藤 雄基。特に呼び名は何でもいい。」

「そうやって一人一人、紹介を進めていった。」

その間に司から賢時と九一は話を聞いた。

「とりあえず、クラス名簿がここにあるか…らっ!」

鞆から引きずり出した黄色のファイルにはなるほど。

クラス委員である司の機転か。

クラス名簿には安否の確認されたメンバーに印がつけてあった。

「えっと…どれどれ？」

九一と賢時は同時に覗き込む。

クラス名簿（一年二組）

1	熱田 将
2	池谷 司
3	井上 美奈
4	江藤 雄基
5	大久保 憂
6	梶原 知紗
7	小宮 恵那
8	小宮 恵理
9	佐伯 薫
1 0	逆地賢時
1 1	清水 百合
1 2	須田 亮子
1 3	孫 来
1 4	田中 正吾
1 5	月裏 九一
1 6	手塚 拓人
1 7	東郷 鈴夏
1 8	中村 樹理
1 9	野嶋 賢太
2 0	沼川 剛
2 1	花本 真実
2 2	堀 純友
2 3	樋口 結奈
2 4	星川 葵
2 5	三上 幸義

2	6	武藤	拓真
2	7	本橋	大地
2	8	山中	絵理奈
2	9	矢野	亜沙美
3	0	横川	玲奈
3	1	和田	広也
3	2	輪野	順

「でも…」

「ああ。そうだ。」

賢時の言わんとしていることが分かったのであろう九一は頷く。

「どっやってこんなに集めたんだ？」

疑問をあらわにした二人がしゃべる。

「くくっ、それはな…」

司はゆっくりと話し始めた。

Part LAST：始まりと終わり

「とりあえず…だ。」

司は静かに話し始める。

「何故俺達が集まったか、と言つと…」

ごくり、と賢時は喉を鳴らす。

「広世のおかげなんだ。」

…は？

「いまいち良くわからないんだけど…」

賢時はやはり半分キレ気味で言う。

こめかみがびくびくと引きつっているのがわかる。

「いや、あいつの作ったアンテナでみんなの携帯が繋がったんだ。」

「ああ！なるほど。」

和田 広也

男子。

自称オタクであり、また電子機器を専門とした予備校に通っているとの事。

携帯を使用するための中継アンテナを作成。
彼の鞆にはそのような彼にとっての『日用品』が詰まっている。

「あいつオタクだからな。」

「オタクオタク。」

そんなことを言いながら二人は頷く。

あれ？

「だったら何で俺達には連絡してくれなかったんだ？」

賢時は、ふと思った事を聞いた。

「え？お前達メール受け取ったからきたんじゃねーの？」
司はさもおかしそうに聞き返す。

慌てて二人は鞆をひっくり返し、携帯を取り出した。

「ここんどこ戦闘続きだったから携帯なんて……」

二人とも、携帯はものの見事に破壊されていた。

「
」
「
」
「
」

司もかける言葉がないのか、黙ったままだった。

「へー？デルタちゃん、って言うんだ？」

クラスの女子ムードメーカー（自称）の清水百合はそう聞いた。賢時たちが何やら相談をしている間、アジトに先に帰るよう言われた残りのクラスメートは異世界、と言う舞台の上で異世界の人と触れたのは初めてだったゆえに、デルタやシータに興味を持った。

「ええ。私は武術をやっていたの。」

試しに、と近くにあった木に正拳突を放つ。

その拳がぶつかった場所は5cmほど窪んでいた。

「キヤー」

「スゲエー」

と言う声が響く。

一躍、デルタは一躍姉御扱いされることに。

緑色のカーテンに覆われるアジトの前の木は優しく葉を散らした。

蟻の巣のように張りめぐるその施設。

その中でも円形の空間を象るアジトの一部屋はその中央。

そこに全員は集まっていた。

「とりあえず、今全員で16人いるわけだから、4人ずつのチーム編成を組もう。」

アジトの頭脳である池谷司と月裏九一はそう告げる。

今までのアジトの活動目標はこの世界の把握及びアジトのメンバーの招集であったが、

デルタ、シータの編入により、第一の目標は達成された。

このクラスは担任がアレだったのが幸いか、この世界に対する順応

は早かったらしくいち早く合流した司と広也は携帯の為のアンテナを作成、そして行動してきた。

「能力：この世界の魔法を使える月裏、賢時は別々で、後は身体の順応で能力を使えるようになった順と俺も別々だな。」

司は九一から受け取った紙にチームの組み合わせを書いていく。
4列4人ずつにならんだ人の名前を書き終えると、

「これだ！」

テーブルに広げた。

チーム月裏	チーム賢時	チーム順	チーム司
・月裏 九一	・逆地 賢時	・輪野 順	・池谷 司
・熱田 将	・江藤 雄基	・須田 亮子	・三上 幸義
・梶原 知紗	・清水 百合	・田中 正吾	・沼川 剛
・シート	・デルタ	・星川 葵	・和田 広也

「目標はメンバー集め。皆、」

かつてない戦争の始まり。

それは

世界同士の戦いとも
人間同士の戦いとも
信じる者の戦いとも

誰となく詠って。

それは始まりと同時に

終わりでもあって

彼等の旅を進める足は

今そこで歩き出したとも

今

そこから進み始めたとも

物語に終わりはなく

唯その世界の流れるままに

ゆく。

墮天使は墮ちて

光に包まれた

羽はもう

無い

Part LAST：始まりと終わり（後書き）

すみません。

区切りがいいので最終回です。

続きは…

書きます。

とりあえず暇がないので。

感想貰えると書く暇が増えます。

やる気の問題です。

とりあえず最終回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7568c/>

Death-Dream

2010年11月18日16時12分発行